中山義秀全集

第二卷

生涯
華燭
信夫の鷹
テニヤンの末日 他

新潮社版

中山義秀全集

第二卷

新潮社版

© Tetsuya AKada, Reiko Yamamoto and
Himeko Nakayama, 1971, Printed in Japan.

中山義秀全集　第二卷

發　行　昭和四十六年九月十日
セット版　昭和五十一年八月三十日

セット定價　二七〇〇〇圓

著　者　中　山　義　秀

發行者　佐　藤　亮　一

發行所　株式會社　新　潮　社

東京都新宿區矢來町七一、電話
業務東京二六六—五一一一、編
集二六六—五四一一、郵便番號
一六二、振替東京四—八〇八

印刷所　塚田印刷株式會社

製本所　神田加藤製本

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
擔にてお取替へいたします。

中山義秀全集第二巻　目次

荒海　七
清風颯々　二八
風霜　四一
みなし兒　五二
生涯　六八
亡兄　八一
羨望　九二
囚人　九九
野の娘　一二九
山家の人々　一三六
落胤　一五〇
秋晴　一六二
老境　一七四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海邊記　一八〇
破れ傘　一八七
梅花　一九九
お花畑　二一九
父と子　二三一
春風を嘆く　二五一
わが花　二六〇
日本の石斧　二七三
ウル・スンガイ　二八四
感忠銘　二九二
亡き山河　三〇四
酒屋　三二三
華燭　三五五

迷路　三七七
靴　三九八
仇し野　四〇八
なすな戀　四二二
わか者　四四二
殘照　四五五
信夫の鷹　四六七
狂法師　四八二
テニヤンの末日　四九一
解説　平野　謙　五三一
解題　五三九

中山義秀全集　第二卷

荒　海

一

初冬の季節、海の荒れ日がつづいて漁師達は船をだせず困つてゐた折の或る夕、夥しい鴎の群が久しぶりに磯に集り寄つてきた。鴎の多く群つてくるのは、鰯の豐漁の前兆らせみたいなものである。

それでその翌朝未明に、思ひきつて、二艘の船を漕ぎ出してみたところが、燈臺附近の難所で沖からひた押しに押してくる大波にさからひかねず、全員必死の努力にもかかはらず、船を巖へうちつけられさうになつた。

その時遙か頭上の斷崖の上に、手をふつて漁師達の船を勵ましてゐる若い女性の裸體姿を發見した。そのため漁師達は思はぬ勇氣と力が出て、からくも危險を脱することが出來たが、さうした時刻にそんな場所へ、若い女が裸で立つてゐる筈はないから、あれは漁師達の信仰する觀音樣だらうといふことになつて、漁夫達總出で村の魚籃觀世音へお禮まゐりをした。事實また女の姿は眞つ白で、黑髪を後ろに吹きなびかし、巖の上に爪立ちながら手をふつてゐる姿は、朝明けとともに弱まつてゆく燈臺の光を背にあび、この世の人ならぬ神々しい姿に寫つて見えたのである。

その場所はまた、自殺の名所でもあつた。數日前にも東京から來た女給風の女が、其處から投身して荒波に飜弄され、無殘な姿で岩疊の上にうちあげられた。午後の晝中で側の岩蔭で釣人が見てゐたくらゐだから、おそらく狂言自殺だらうといふことになり、藁火で暖めたりしてみたけれど蘇へらなかつた。肉置きの見事な女で村人は惜しがつたが、投身前既に毒を呑んでゐたのである。

海仙閣ホテルに滯在してゐる畫家の野々上は、女中の口からそのやうな話を聞かされて、驚きもしないかはり笑ひ出しもしなかつた。彼はその朝話の觀音樣をみたばかりでなく、その正體も知つてゐた。しかしあのやうに弱りはて歸つて行つた永見嘉子の姿を思ふと、偶然とは云へ彼女が漁民の奇蹟の對象とされたことを、彼女のために祝福したくなつた。彼の推測に誤りなければ寧ろ彼女の方こそ、

怒濤を押しきつて船出してゆく漁民の勇しい姿に救はれたのに違ひなかつた。野々上さへ激しい風波をしのいで、沖へ出漁して行く二艘の船を眺めて、

「おお、この風、この荒波にも出てゆくのか」

さういふ思ひで、いたく感動させられたからである。

野々上は荒いことにかけては日本一だと云はれてゐる此處の燈臺下の怒濤を描くために、約一ヶ月前から岬の宿に滯在して毎日怒濤と睨めつこしてゐた。彼は二十號ばかりの物をすでに一枚書きかけてゐたのだつたが、彼の仕事を毎日觀察してゐた嘉子から、

「溶けかけた夏の氷水のやうだわ」

と簡單にこきおろされるまでもなく、大巖を呑むばかりの勢ひで奔騰し、巉岩の間を荒れまはつてゐる逞しい怒濤の生態が、一向畫面に盛りあがつてこないことに苛々してゐた野々上は、制作を中止し再び巖上に立つて怒濤の凝視をつづけだした。

野々上は頭髪は灰色で皮膚はつやなく皺ばんでゐるために、一寸見には四十七八歳に見えるがまだそれほど年寄つてはゐない。肺結核で七年間寢たきりだつたが、やつと起きあがれるやうになると、今度は妻が靜脈から少しづつ血の洩れる紫斑病といふ厄介な病氣にかかり、大學病院の研究材料にされて三年後に死んだ。

それから二人の遺兒を育てあげながら、畫業に專念したのだが、最も大切な十年間を中絶させられてゐた痛手は、容易にとりかへせなかつた。頭で想ふ十分の一も技術が自由にならないのである。美術學校に在學時代から、祕密で官展に當選してゐたやうな早熟さを思ひ、友人等のその後の大きな進歩を考へると、若い時代のすべり出しの華華しかつただけに、自分の上に加へられた現實の重壓にそつとしない譯にはゆかなかつた。

しかしその絶望や苛立ちも七年間の臥床とその後の苦惱で、これも神の大きな試みだといふ信仰と諦めに到達することができた。そして再び最初の出發點から、貧しい一畫工として出直す謙讓な心持で、仕事にとりかかりだしたのである。一木一草を描くにも、己の心持をゆるがせにはすまい。全身全靈を傾けて、對象の生命をさながらに描きだすことに努めよう。さういふ覺悟だつた。

ところが、その覺悟をいざ仕事の上に實現しようとなると、蝕まれた彼の體力や、ほとんど耐へがたいまでに現實生活に打碎かれた彼の氣力からいつて、實に容易な業ではないことが解つて來た。一作一作と仕事の數を重ねてゆくにつれて、ますますその困難の度が加はつてゆくのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

野々上は東京の郊外の森の中に住んでゐた。彼の住居は彼自身の設計になるバンガロー式のもので、彼は其處に七年間彼の病を養ひ、妻の葬禮を其の家で營んだ。妻の病氣中から老婆を雇つて、子供達の世話をさせてある。生活費は實家や兄弟達から月々補助があつた。また華々しかつた彼の新進畫家時代に、彼の畫を買つてくれた人々が今でも彼を保護してくれてゐて、時々肖像畫や何處其處の風景畫といふやうな註文をくれる。

彼がこの荒磯へ怒濤を寫しにやつてきたのも、さういふ依賴者の註文によるのだが、彼自身大いに希望してゐたことでもあつた。彼は巖を呑み岬の根をゆるがし、丈餘の高さに舞ひあがり飛散する大瀑布のやうな波の壯觀に、彼の萎縮した心腹を洗ひ流したく思つた。自然のうちにひそむ無限の力が、思ひのままに發揮された逞しい動きによつて、彼のみじめすぎる現實生活を蹴返したくなつたのである。

しかし野々上は日々岬の斷崖の上に立ち、脚下に咆哮する狂瀾の姿をみつめ續けてゐる間に、最初は旺んな生命の雄叫びのやうに思はれた波濤の跳躍も、實は千變萬化する光景によつて視覺を眩惑する自然のメカニズムにすぎないことがだんだんと解つてきた。

すると氣ほひこんだ彼の意氣込みもそれにつれて凋んできて、壯大な景觀だけにかへつて一莖の花にこめられた生命のみづみづしさにはるかおよばぬ、運動の空しさばかりが強く感じられ、怒濤を寫さうとする努力が苦痛にすらなつてきた。

「いづれ通俗的な畫題の代物さ」

さう觀念はしてみたもののその光景をさながらに寫しださうとするためには、やはり眺める對象から何物かを感じとり發見しなければならぬ。それで苦痛をこらへながら、たゆまず怒濤を觀察しつづけてゐる次第だつたが、さういふ彼の心理と努力には、彼が長年病苦と鬪ひつづけてきた忍耐と共通する執拗さがあつた。

永見嘉子はまたさうした野々上の一向はかどらぬ仕事ぶりを、散歩の途次に立止つては退屈さうに一時間でも二時間でも眺めてゐた。野々上は初め頃はさして嘉子の存在などに氣をとめてゐなかつたが、彼女が彼と同じ宿でしかも彼の來るずつと前から病氣療養に滯在してゐることを知ると、さうさう知らぬ顏もできないため何時とはなく彼女と口を利くやうになつた。

そして嘉子の病氣が野々上を長い間苦めてゐる病氣と同じ種類のものであるらしいのに氣がつくと、一種特別な親みと同情とを彼女の上に抱くやうになつた。嘉子は湘南の

サナトリウムに半年ばかり這入つて療養生活を會得すると、其處よりオゾンが多いといふ此の海岸にきて、サナトリウムにゐるより廉い費用で彼女の病氣を養つてゐた。

しかしその病氣に深い經驗のある野々上の眼から見ると、嘉子の病氣は決してよい方に向つてゐるとは思はれなかつた。彼女は、規則正しい生活をきびしく守り、宿の前の芝生に据ゑられた寢椅子の上で日光浴などしてゐるやうだが、この病氣にとつて新鮮な空氣や滋養のある食物よりもつと大切だといつてよい、精神の安靜の少しも保たれてゐない樣子が、彼女のきらきらする尖つた眼附から窺はれた。

この病氣における女性患者が男性より癒る率が少い上に病氣の進行もはやいのは、肉體よりむしろ精神的な抵抗力が弱いからだとさへ考へられる。不安にとらはれやすくそして諦めにつきにくい女性は、病氣にうち克つてみせるといふ積極的な勇氣や信念を獲得することなど尙更覺束ない。そして瑣末な事に多く心を勞しすぎて、病狀を一層惡化させてしまふ。

嘉子のいらいらする眼附にも、さういふ神經質らしい不安さや精神的な懊惱が色濃くあらはれてゐた。身體は風にもたへぬばかりほそぼそとしてゐる。眸の大きい美しい顏は小麥色に陽灼けて、眼のまはりは特に西洋婦人が假面舞踏會で覆面したみたいに眞黑だつた。

その黑い光りの環の中から兩眼の輝いてゐる樣子は、滑稽といへば滑稽に感じられたが、そんなにまで陽灼けしてもどんなにか生きたがつてゐる彼女の心根を想ひやると、病氣と必死になつて格鬪してゐた時分の野々上自身の苦惱をかへりみ、かぎりなく哀れに思はれてならなかつた。

かう思ふ野々上にしろ不拔の克己力で病氣の火の手を喰ひとめ、それを病竈に封じこめてしまつた程度であつて、無理なことをすれば何時爆發してくるかも分らなかつた。畫家にとつて一番大事な視力すら最早常人のやうではなく、凝視を少し長く續ければ對象がぼやけて見えなくなる程に茫とかすみ傷んでゐた。だから氣力も衰へがちで、自然畫に力が入らなかつた。巖を打ち碎くばかりに激しい怒濤の飛沫を描いて嘉子から、

「溶けかけた氷水のやうだわ」

と評されても仕方がなかつた。

「せめて我が畫に一滴の血を」

さう念じてあせればあせるほど、眺めやる自然の對象の前に棒立ちにならざるをえなかつた。思ふにまかせぬ彼の技術と衰へた氣力では、描かれた自然はすべて死物と化し、彼を絕望の恐怖につき落してしまふのである。

「現實生活にはさんざんに打ちのめされ、周りの自然には苦痛と戰慄しか感じられないとしたら俺は一體どうすればいいのか」

野々上が眼下の怒濤を瞰下して、彼の懊惱などにまつたく關りなく、轟々といふ波音とともに巨巖にぶちあたり、空に五彩の花を吹き散らしながら、再び斷崖の岩根をゆるがし續けてゐる怒濤の壯觀に心を嚙まれてゐると、不意に背後を突かれるやうな氣がして、思はず上半身が前へよろめきかけた瞬間、全身の血が逆流して顏色が眞つ靑に變つた。斷崖から墜ちれば彼の生命はない。突兀(とつこつ)とした巉岩の一つに頭を打碎くか、黑味を帶びた深淵の渦卷の中に呑みこまれてしまふかするであらう。

彼が恐怖に凍つて後をふりむくと、思ひがけない間近に突立つてゐる嘉子の姿を發見した。彼女もまた野々上に劣らず靑ざめて、唇の色まで白く兩眼がつりあがつてゐる。

野々上は、

「何をするのです」

と咎めるかはりに、喉がひつついたやうな聲で、

「どうしました」

と訊いた。すると嘉子は、ぎらぎらする眼で、暫らく野々上の顏をみつめてゐたが、

「私、貴方がおつこちたかと思ひましたわ」

「なに、一寸輕い目まひが起きたのです」

「あまり熱心に、波ばかり眺めていらつしやるからよ。歸りませう」

それから二人は燈臺前の廣場へあがつてきて、肩をならべながら宿へ歸りかけたが、嘉子は前に兩袖をあはして顏は鳥肌たつてゐた。

「寒いのですか」

「ええ、風邪をひいたんぢやないかしら」

「いけませんね、風邪をひいちや」

さう云へば野々上も熱のあるやうな、妙に肌寒い氣がしてならなかつた。彼は先刻經驗した不氣味な感覺から脫れられなかつた。あれは嘉子が背後から彼を突き落さうとしたのか、それとも彼自身が云つたやうに眼まひのためさうした錯覺におそはれたのであらうか。そしてそれに愕いた嘉子が、彼を助けようとして彼の背後に近づいてきたのであつたらうか。

人は屢々夢想と事實の區別をつけかねる、通り魔みたいな瞬間を經驗するものだが、野々上もまたさういふ現實のエア・ポケットに落ちたやうな氣持だつた。

二

永見嘉子は初冬の荒涼とした海岸生活の寂寥に、次第にたへがたくなつてゐた。

彼女は一夜のうち二時間置きぐらゐに、ぼんやりと眼をさました。するといつもきまつて、先づ眞つ先に耳に入つてくるのは波の音だつた。閣の底から傳つてくるその音は、地軸をゆるがすやうな重く鈍い響だつた。

嘉子は最初その音を、曠野の果を轟々と吹きめくつてゐる風の聲かと思つた。馴れてきてからも、やはりさうした錯覺におちいつた。そしてその度毎に何とはなく故郷の自然を思ひおこし、夜風に吹かれながら唯一人で知らぬ野道をさまようてゐるやうな何とも云ひがたい悲しい子供心にさそはれた。

野々上は波音におびやかされてゐる嘉子の惱みを聞くと、「そんな物を、氣になすつてはいけない。むしろあの音こそ、貴女の蝕まれた胸を新しく蘇へらせる、賴母しい生命の聲だと信じこむやうに、貴女の考を轉換させることですな」

さう云つて教へたが、嘉子はやはりさういふ考に變れなかつた。反對に彼女の生き死になどに全く無關心な、永遠に同じ運動をくりかへしてゐる非情の聲に感じられてならなかつた。

嘉子の無聊な一日のせめてもの慰めや樂みといへば、洋上の日の出を眺めることだつた。その盛んな眺めは、どのやうに疲れしぼんでゐる彼女の胸もひらくほどに、勇しくみづみづしかつた。

よく眠れぬ彼女は、毎日夜明けが待遠しかつた。五時になると寢臺から起きあがつて東の窓を開き、彼方の水平線に現れる日の出を待つた。彼女が最初に日の出を眺めた時には、毒々しいばかりあざやかな色彩の大きな物體が、至極無造作に眼の前の水平線へいきなりのしあがつてきたので、一寸ぎよつとするやうな氣持にうたれた。

それで、思はず息をひそめて、見る間にぐんぐんと空へのしあがつてゆく太陽をみつめてゐると、灼熱した鐵板のやうなその表面が焰をあげてめらめらと燃えたつやうに白い輝きを加へてゆくにつれ、空にふきあがつた火焰のやうな反映が、まるでその熔鑛爐に吸ひこまれでもしたやうに跡方なく消えうせてしまつた。そして其後から薄青い空色が、ぼうつとした遙な感じをもつて宙に浮びだし、反對に

下方の海上は俄に黑ずんできて、海岸近くの巖にうちあげる怒濤の高い飛沫が、目ざましいばかりいきいきとした輝きを加へてきた。

嘉子は日の出と向ひあつた後は、いつもしんが疲れたやうな氣だるさを感じた。しかし決して惡い氣持ではなかつた。單調な海の眺めに飽きがきても、かうした日の出と、うす紫の光線の綾の中を白い鷗が群り舞ふ浦の入江の日沒とは、いつ見ても美しかつた。

嘉子達が滯在してゐる海仙閣は、東南を海に面した丘蔭にあつた。ホテルの前は廣い芝生のスロープで、ゆるい勾配を描きながら高い斷崖の端に達してゐた。斷崖の下は荒海で、黑い岩礁の間を碎けた怒濤の名殘りが縞目を白く織りだしながら渦卷いてゐた。

丘陵の反對側は石山になつてゐて、二三人の石工が終日石を切り刻んでゐた。そのかん高く冴えた鑿の音が、時とすると風の工合で嘉子の耳にも聞えてきた。

宿の東には燈臺の白堊の塔が、岬の突端に聳えたつてゐて、朝日にはうす紅に、晝は青空と碧海の反映で、うす青く彩られてゐた。夜になるとその頂に灯がともり、光の粒粒の白くしみついた巨大なレンズが囘轉して、暗い海上をさつさつと掃くやうに、長い光芒をひらめかし續けてゐる。

その燈臺見學の客が、土曜から日曜へかけてある以外、海仙閣に殆んど客はなかつた。滯在客は野々上と嘉子だけである。野々上は嘉子より後に來たのだつたが、來る早々毎日小雨や風の烈しい日にも、寸暇を惜むやうにして、畫布を小脇にかかへせつせと外へ寫生に出かけた。

そのため嘉子は野々上を、冬の休暇でやつてきた學校の畫の教師かと思つた。風采はあがらないし、ひどく年寄りじみてもゐる。あんなに勤勉に出かけて行つて、一體どんな畫を書くのであらうと、彼の後を跟けて行つてみると、野々上は燈臺下の斷崖の上に佇んで、腕を拱きながら毎日怒濤を眺めてゐるにすぎなかつた。

それからやつと取かかつた畫は、素人の嘉子がみてもつい辛辣な事を云ひたくなるくらゐ生彩がなかつた。あのやうに毎日毎日怒濤を眺めて暮しながら、この人は何を觀てゐるのであらうか、と怪まれるばかりである。

嘉子は才能のない藝術家が、天才達の犧牲になつて不遇に老いてゆく映畫をみて、彼の身の上にいたく憫みを感じた記憶があつたが、野々上もさういふ運命の一人ではなからうかと氣の毒がられた。その後彼の身の上を女中や野々上自身の口から聞き知り、一層彼に同情をよせるやうになつた。そして彼の畫にたいし心ない感想をのべたことを、

ひそかに悔いもした。
野々上は嘉子の感想を聞くと、ひどく失望した樣子で二三日彼女と口を利かなかつた。それから彼は制作を中止して、再び怒濤と睨みあひながら空しく時をおくつてゐた。嘉子にしてみれば彼女にも幾分責任があるやうな思ひで、彼のことが氣にかかり彼が再び制作を始めるまで、なんとなく落着けないみたいな心持だつた。
それで彼の姿をそれとなく注意してゐた時に、ああいふ事が起つたのであるから彼女ははつとなつて、まるで彼女自身が彼を崖から突き落さうとしたやうに眞つ青になつた。彼女はその時のはずみの一寸した出來心にしろ、野々上は苦しみと絶望のあまり自殺を企てたと錯覺したのである。
嘉子もあの時野々上と別れて、一人で部屋へひきとつてからも、身内の顫へと胸の動悸がやまなかつた。そして夜は惡夢に憑かれ、おびただしく寢汗をかいた。彼女は枕もとに通ふ波の響きが、彼女の生命を狙ふ魔物の唸り聲のやうに氣味惡かつた。
彼女は風邪をひき、外へ出なくなつた。普段でも彼女は、殆んど外へ出なかつた。風のない暖い日をえらんで、附近の松山や燈臺附近をしばらく散歩する以外は、部屋の寢臺の上に横たはつてゐるか、芝生の上で日向ぼつこしながら、ぼんやりと海を眺めて暮してゐた。
そのため此處へ來たては透きとほるばかりに青ざめてゐた嘉子の顏も薄黑く陽灼けして、特に眼のまはりは彼女の雀斑を隱すほどに濃くなつた。女中の若子はそれを見ると、內心の可笑しさを隱しながら、
「奧樣は、お丈夫さうにおなりですわ。此處へ來たては、本當に弱々しくていらつしやつたのに」
とお世辭を云つた。
すると嘉子はいくらか氣まり惡げに、片手を頰にあてながら、
「汚くなつたでせう。あまり陽にあたりすぎて、この邊がひりひりするくらゐですわ」
「いいえ、その方がかへつて結構ですわ。おからだも、ずつとお肥りになつたのぢや御座いませんかしら」
嘉子はさういふ氣慰めを云はれるのが、むしろ苦痛だつた。夜はよく眠れず食慾もなく、肥るどころか反對に骨立つてゆくのが自分にもわかるくらゐだつた。
「どうせ私は、助りつこはないのだ」
さうした諦めで、毎日數回體溫をはかり、脈搏や呼吸を數へるサナトリウムの嚴格な習慣も忘れたやうにかまはなくなつてゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com